

船場アートカフェ 芸術によるコミュニティ再構築

芸術がもつ「接合／媒介する力」に焦点をあて、都市における芸術の可能性を追求しています。大阪固有の文化資産に着目しつつ、芸術を介して人と人をつなぐ新しいコミュニケーションの場を創造する試みを展開します。

なぜ〈船場〉で〈アートカフェ〉？

船場は、天下の台所と謳われた江戸時代から、繊維問屋をルーツとする総合商社が戦後の復興を牽引した高度経済成長期まで、常に大阪の中心、ひいては日本経済の中心として栄えたまちです。しかし、1970年代末からの繊維不況や産業構造の変化などによってかつての賑わいを失い、今や「シャッター通り」と揶揄されるほどです。

2006年1月に開設した船場アートカフェは、このような歴史をもつ船場を拠点として「アートによる都市再生」の研究と実践に取り組んできました。さまざまな人やモノが集まる中心地であった船場には、経済的な地盤に裏づけられた豊かな文化が息づいています。その文化資源に着目しながら、アート環境を日常の中につくり出すことによって、コミュニティの再構築の可能性が高まると私たちは考えています。

船場アートカフェでは、地域コミュニティとの協働の試み（まちのコモンズ）や船場に豊かに残る近代建築の活用（船場建築祭）、アジア音楽への実践的アプローチ（船場音泉）、病院や施設などにアートを投入するプロジェクト（coco-A）など、従来にはない組み合わせを通して人々の感性を刺激することにより、人と人、まちと人をつなぐプロジェクトを展開してきました。

そもそもカフェとは喫茶店を指す語ですが、人々が集い語らう場の象徴でもあります。アートによる創造的コミュニケーションの形成を目指して、今後もさまざまなプロジェクトを展開する予定です。どうぞご期待ください。 << 石川 優（船場アートカフェRA）

船場センタービル ミュージアム in 船場まつり

2009年9月14日(月)から21日(月・祝)まで、船場アートカフェでは船場センタービル5号館2階にて「船場センタービル ミュージアム」を開催しました。中船場の4つの商業団体による街の活性化を目的としたイベント「船場まつり」の一環として企画され、来年40周年を迎える船場センタービル建設当時の貴重な写真や映像などを多数展示し、延べ855人が来場しました。

特に来場者の注目を集めたのが、ビルが完成するまでを記録した16ミリフィルムです。映像には、全長930mという全国的にも珍しい巨大建造物に関わった当時の人々の想いや、オープン当初の繊維卸店を中心とした活気溢れるビルの様子なども収められ、船場の現在と未来を考える上で大きな反響を呼びました。

また、会場では映像活動ユニットVIDEO ROMANTICAによる映像作品を展示したほか、聴覚や触覚といったさまざまな感覚をテーマとしたまちあるき「船場ウォーク」(6回)を同時開催し、アートの視点から都市の魅力を再発見する試みを行いました。

■石川 優(船場アートカフェRA)



会場の様子

プライベート美術館@大阪・南船場

2009年11月19日(木)から12月25日(金)まで、船場のまちなかに障害のある人の作品を展示するイベント「プライベート美術館@大阪・南船場」(主催:財団法人たんぼの家、協力:船場アートカフェ他)が開催されました。



難波神社では巨大絵馬が展示された

このイベントは、まちに集まる様々な人たちの間にアートを介してコミュニケーションを生み出すという趣旨で企画され、中間支援組織エイブルアート・カンパニーに登録している15名のアーティストの作品がアパレルショップやカフェ、神社など12ヶ所に展示されました。自ら展示作品をセレクトしたというあるアパレルショップでは、鮮やかな色彩と力強いタッチで描かれた作品が服のもつ雰囲気と調和をなし、ハイブリッドなアートスペースが出現していました。

ショップで物を買うだけでなく、美術館で作品を見るだけでもない、アートとまちと人がゆるやかにつながっていく光景。このようなユニークな取り組みが、アートを媒介とした社会包摂の実践として今後社会に広まることが期待されます。

■石川 優(船場アートカフェRA)